

福島第一原子力発電所廃炉検討委員会セッション

「福島第一原子力発電所廃炉検討委員会」活動報告 ―廃炉の安全・円滑な実施に向けて―

(6) 事故提言フォロー分科会の活動について

(6) Activity of Subcommittee on Follow-up of Unresolved Issues of the Accident and Proposals from AESJ

*山本章夫¹¹事故提言フォロー分科会主査 名古屋大学**1. 概要**

原子力学会は、2014年3月に「福島第一原子力発電所事故その全貌と明日に向けた提言: 学会事故調 最終報告書」(以下、事故調報告書)を出版し、その中で将来にわたる原子力災害防止にむけた提言をとりまとめた。提言は、実行に移されてはじめて原子力安全に貢献できると考えられることから、その取り組み状況をフォローアップすることは極めて重要であると考えられる。このような状況のもと、学会廃炉委員会の事故提言フォロー分科会においては、事故調報告書の提言についての取り組み状況と、事故進展に関する未解明点のフォローを実施している。

2. 事故調提言への取り組み状況の取りまとめ

提言に対する取り組みの調査結果については、2016年3月に「学会事故調最終報告書における提言の取り組み状況(第1回調査報告書)」として取りまとめた。本文書は、原子力学会の福島第一原子力発電所廃炉検討委員会のHPよりダウンロード可能である。なお、参考のため、今後さらに取り組みを強化すべきと考えられる事項についてまとめておく。

2-1. 原子力安全の基本的な事項

安全目標の合意形成と活用は取り組みが緒についたところ。引き続きの取り組みが望まれる。また、リスク情報の活用がなされつつあるが、活用方法、活用範囲の検討を含め、さらに取り組む余地がある。基本安全原則の明確化、深層防護の検討と明文化、規格基準類の体系化などについては、原子力学会での検討が進められている。今後、規制図書などへの反映が期待される。核セキュリティの強化については、安全対策との相乗効果をさらに生み出すべく、分野間の連携に関する取り組みが望まれる。

2-2. 直接要因に関する事項

外的事象対策、過酷事故対策は、新規制基準および自主的安全性向上などの取り組みにより、大幅に強化されつつある。

2-3. 背後要因のうち組織的なものに関する事項

原子力学会が果たすべき責務の再認識については、会員の所属意識の希薄性も含め、実際の行動に結びつくにはまだ多くの課題があり、継続的努力が必要である。安全研究ロードマップについては、着実に取り組みがなされている。ローリングを通じた継続的改善を実施し、安全研究に着実に取り組むことが望まれる。学際的取り組みの強化として、他学会との連携などが図られつつある。

2-4. その他

原子力安全研究基盤の充実については、「自主的安全性向上・人材育成ロードマップ」などの策定、各組織体での取り組みにより、強化されつつある。国際協力体制については、福島第一事故ベンチマーク(BSAF)、PRA 日米ラウンドテーブルの実施、原子力リスク研究センターの発足など、様々な取り組みが進められている。人材育成については、国からの支援を含め、様々な取り組みがなされている。一方で人材育成は長期的な課題であり、息の長い取り組みが望まれる。放射線モニタリングについては、体制の整備が図られ

つつある。廃棄物の減容化・再利用などによる最小化については、今後さらに重要となる問題であり、引き続き取り組むべきである。

3. 今後の活動

事故後 5 年が経過し、事故進展についてはかなりの知見が得られてきている。そこで、これまでに得られた事故進展に関する新たな知見、これに基づく解明事項の解明状況を整理し、これまでの知見をとりまとめることを計画している。概要は以下の通りである。

- ・フォローすべき課題(未解明点)を確認する。学会事故調報告書、東電未解明レポートなどを参照し、現在すでに解明された課題でも、事故直後に未解明点とされていたものを含めて整理する。

- ・抽出された課題について、最新の知見を確認し、事実関係を取りまとめる。

- ・残されている課題を整理し、今後、安全性向上や水平展開などの観点から優先して解明に取り組むべき課題について検討する。

- ・未解明点の調査・検討に際して生じると考えられる課題を整理する(例：廃炉作業時のデータ取得に関する留意事項、データを分析する際の留意事項など)

- ・企画セッションや、シンポジウムを通じて情報発信を行う。

4. まとめ

事故調提言の中には、その取り組みに長期間を要するものも含まれており、今後も継続的に提言への取り組み状況を確認する必要がある。また、未解明となっている技術課題の解明に向けた活動に取り組む予定である。

* Akio Yamamoto¹, ¹ Nagoya University